自然繁殖で資源拡大

ポー川支流で　標津科学館　サケ稚魚の捕獲・調査

捕獲用の網を設置する市村館長（中央）と横森さん

標津町の標津サーモン科学館（市村政樹館長）は24日、町内を流れるポー川支流で、自然産卵の研究によってふ化した、サケ稚魚の捕獲・調査を開始した。

「標津町サケマス自然産卵調査協議会」（会長・西山良一標津漁協組合長）が進める事業の一環。サケ・マスの自然繁殖による漁業資源拡大を目的として、2014年に開始した。

昨年11月には、日大の牧口祐也専任講師（34）と同科学館が共同で、個体識別したサケの自然産卵や配偶者選択について調査を実施。ポー川支流では、一部に囲いを設置し、雄15匹、雌10匹を放って行動を記録した。今回はその結果を元に、どのペアから生まれた稚魚が生き残っているかなどを調べる。

この日は同科学館職員のほか、牧口講師の下で学ぶ日大4年、横森伊治郎さん（22）が同行。産卵場所から、約30㍍下流に網を設置した。横森さんは「サンプル回収とデータ解析を行って、卒論に生かしたい」と話す。

捕らえた稚魚は遺伝子を解析し、親魚を特定した上で、今後の人工ふ化や自然産卵についてのデータとして活用する。稚魚の捕獲は29日ごろから始まり、約1カ月間続けられる。牧口講師は「自然産卵によって生まれた稚魚は、免疫遺伝子に多様性を持たせることができる。ポー川で採取できるデータはとても貴重なので、今後も継続していきたい」と意気込みを語った。

（須貝喜治）

補助金増額で　会費負担凍結

北方漁業権推進委支部

北方四島に漁業権を持っていた関係者でつくる北方地域漁業権補償推進委員会根室支部（支部長・小倉啓一歯舞漁協組合長）は24日、道立北方四島交流センターニ・ホ・ロで総会を開いた。会員である元島民の会費負担軽減問題で、補助金の増額を要請、了承を得たことから、当面会員の会費負担を凍結し、運動を展開していくことにした。

同会の会費は、元島民の島の会など11団体1148人が負担してきたが、平均